

キャンベラ奈良公園彫刻コンクールへの出品作品について

奈良市の姉妹都市であるキャンベラ市（オーストラリア首都特別地域政府）が実施する「キャンベラ奈良公園彫刻コンクール」への出品者5名から、出品作品の模型が提出されました。これらの模型は、9月15日まで市庁舎一階玄関ホールにて展示した後、キャンベラ市へ搬送します。

今年10月にキャンベラ市内にて彫刻コンクール審査を行い、最優秀作品一点を決定します。審査は出品作品の模型およびデッサンに基づいて行います。

最優秀作品は平成22年（2010年）10月にキャンベラ市にあるキャンベラ奈良公園に設置される予定です。

1 コンクールを行うに至った経緯

キャンベラ市は、同市内にパブリックアートを設置する事業を続けておられ、現在約70基の作品があります。今回のコンクールは、昨年9月にキャンベラ市のジョン・スタンホープ チーフミニスターから藤原市長（当時）に、平城遷都1300年を祝うため同市内のキャンベラ奈良公園に設置する彫刻作品の募集についての協力依頼があったことがきっかけです。コンクールの優勝作品は、キャンベラ市が設置するパブリックアートとしては、初めての海外制作作品となります。

2 コンクールの概要

(1) テーマ

奈良市とキャンベラ市は、1993年10月26日に姉妹都市提携して以来、これまで数々の交流を重ねてきました。そこで作品のテーマは、「キャンベラ市と奈良市の友好関係と相互理解及び両都市の長年にわたる姉妹都市関係」とします。

(2) スケジュール

年	月	内 容
21	3	コンクール出品者の募集（3月1日～4月30日）
		↓
	5	奈良市での審査（コンクール出場者 5人の決定） （出場者は、コンクール出品作品の模型を制作）
		↓
	10	キャンベラ市で彫刻コンクール開催 （最優秀作品 1作品を決定。制作費・輸送費として20万豪ドルを支給） 20万豪ドル＝約1,560万円（平成21年8月31日現在のレートで計算）
		↓
22		（キャンベラ奈良公園に設置する作品を制作）
	7	設置作品をキャンベラ市へ輸送
	10	キャンベラ奈良公園へ最優秀作品を設置

(3) 応募資格

次のいずれかに該当し、過去に彫刻の制作受託経験を有する人。この資格を満たす人で構成されるグループでの応募も可能。

- ア 奈良県在住・在勤者
- イ 奈良県に住んでいたことがある人
- ウ 奈良県内の学校に在学歴のある人

3 第1次審査の概要

奈良県内在住・在勤者または居住歴、通学歴のある方を対象として、今年3月1日から4月30日までの期間に募集いたしましたところ15人の方々の応募がありました。

審査は、過去に制作した作品と受賞歴などを記載した応募書類を基に行いました。

ア 審査日時 5月25日（月） 午後1時～午後5時

イ 審査場所 キャンベラの間（市庁舎中央棟5階）

ウ 審査員（敬称略）

- ウェンディ・ティーケル（オーストラリア国立大学美術学部彫刻学科長）
- デイビッド・ホイットニー（オーストラリア首都特別地域政府首席大臣府芸術室長）
- 辰巳 ^{ふみかず} 文一（奈良市美術家協会会長）
- 島田 ^{やすひろ} 康寛（美術評論家）
- 藤原 昭 （奈良市長）

エ 審査の結果

キャンベラ市で行う彫刻コンクール出品者5名を決定いたしました。5名の出品者には、8月31日を締切として彫刻コンクールに出品する作品の模型、デッサンを提出していただきました。

出品者一覧（敬称略）	
かとう 加藤	しんき 信喜
さかえ 栄	としあき 利秋
さかぐち 坂口	きよみ 紀代美
たけまた 竹股	けい 桂
むらまつ 村松	たつや 達也

徳 TOKU

かとう しんき

《出品者》 加藤 信喜

- ・大阪府在住（奈良県在勤）
- ・主に使用する素材はスチール



《作品制作の意図》

法隆寺が建てられたのは今から1400余年前のこと。奈良斑鳩の地に、聖徳太子が建立したと伝えられている。伽藍には五重塔と金堂が仲良く肩を並べるように配置され、互いに響きあい、アシンメトリー※の美をかもしだしている。キャンベラ市を五重塔、奈良市を金堂に見立てることで、両都市の友好関係と相互理解及び長年の姉妹都市関係をかたちにすることができるのではないかと考えた。

公園の視覚的軸線をより明確にするために伽藍になる5m角の敷地を軸線と平行に置き、人々は森林追悼碑と「徳」との間をゲートのように通りぬけてアプローチすることになるであろう。

五重塔は錆仕上げの鉄板で構成され、見る角度によっては面だけの立体になるようデザインした。見上げると平和を象徴する小鳥がさえずっている。実は大樹を象徴した造形でもある。一方、金堂は自然石そのものであり、ベンチでもある。宙に浮いて見えるよう地面から離している。

※アシンメトリーとはシンメトリー（左右対称）とは違い左右非対称のこと。



さん さん
燦・讚

さかえ としあき

《出品者》 栄 利 秋

- ・ 奈良市在住
- ・ 主に使用する素材はブロンズ、石
- ・ 彫刻のあるまちづくり事業第1号基「^{はな}華」作者



《作品制作の意図》

「燦」：キャンベラと奈良市の友好関係と相互理解及び両都市の長年にわたる姉妹都市関係を、太陽の燦として輝くさまの、「燦」を象徴として表現
「讚」：は両都市の良好な友好関係を「褒め称え」今後も友好関係の一層の深まりと発展を願って「讚」としました。

造形的観点

太陽（大自然）の光を受け燦として輝く作品、その光は太陽の運行と共に刻々と変化し作品の周辺に光の波動となってエネルギーを発し続けるでしょう。又観る人の移動による視点の変化により作品に動勢が生じ、躍動感となって異なる表情を見せる、その生き生きとした生動感、見る人々に新鮮な驚きと共に喜びが伝わる作品となってほしい。

奈良市中部公民館前に建つ「華」（'91年作、奈良市彫刻のある街づくり事業第1号作品）と今回の「燦・讚」は、対となる作品です。姉妹都市であるキャンベラは、球体を基本に造形し、奈良は正六面体が基本になっています。



FLOWER GATE —CANBERRA TO NARA—

さかぐち きよみ

《出品者》 坂口 紀代美

- ・奈良市在住 奈良女子大学文学部付属高校、奈良女子大学卒
- ・金属、石、コンクリート等を素材に彫刻
- ・1996 建設省都市局長賞受賞、東京都練馬区大泉中島公園、環境彫刻「石舞台」21t
- ・2005文化庁特別派遣芸術家在外研修員として、ドイツにて彫刻研修



《作品制作の意図》

キャンベラと奈良の友好のシンボルを、両国の人々を繋ぐ手を主題に現代的に表現した。大きな暖かな手が人々を招き、人々は期待感を持ってキャンベラ側入り口から入場し、奈良側に至ることができる。又、モニュメントの間を通り抜け遊んで楽しむことができる。大きな手は、奈良の大仏が、人々に幸せをもたらす手もイメージしている。

オープンでモダンなキャンベラのイメージを表現するため、丈夫なステンレススチールを素材に選んだ。ステンレスはメンテナンスも良く、大きな建造物を創り出すことができる。その鏡面の表面は、公園の美しい木々や自然を映し出し、効果的なランドマークとなる。

ステンレスの銀色は、オープンなキャンベラを現し、金色は伝統的な奈良を現し、彫刻の中で一体となる。手は、奈良の仏が人々に幸せを与える手でもあり、人々は公園でリラックスした幸せな時間を過ごすことができる。彫刻上部からワイルドフラワーが人々を祝福する。



軌跡の器 一道一 The Vessel of Loci

たけまた けい
《出品者》 竹股 桂

- ・奈良市在住
- ・「時の集積」をテーマとし、様々な素材を用いて制作を試みる。
- ・彫刻のあるまちづくり事業第9号基「軌跡の器」作者



《作品制作の意図》

私たちは、現在奈良という世界に誇る古代からの美術の中で生活している。それらの素晴らしさを再認識すると共に伝えていかなければならない。今回のモニュメント設置を機会に、彫刻家として両都市の友好がより深まることを願い造形に表現した。

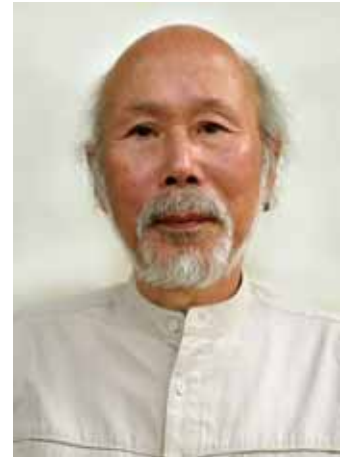
私は、今に遺る造形物の中で殊に仏教建築の五重塔の美しさに惹かれる。またその造形性に興味を持つ。釈迦の廟（ストウーパ）が古代中国、朝鮮を経て塔の形になり、日本の伽藍配置でよりシンボリックになった。木材の様々な構造や瓦を重ね天に向かい積層上昇していく塔に私は人間の「行為」と「時」を見るのである。建造に込められた思いと庶民の祈りを感じゾクッとする。キャンベラ奈良公園にふさわしいものとして五重塔からのインスピレーションと私の制作テーマである「時の集積」を合わせた形として表現した。これを仏教の伝来の重要な位置を占める中国において現地の花崗岩で制作を考えている。



奈良・大和投影—1月のオリオン—

出品者 村松 達也
むらまつ たつや

- ・奈良県在住
- ・主に使用する素材はブロンズ（青銅）、御影石
- ・彫刻のあるまちづくり事業第5号基「今昔のひだまり」作者



《作品制作の意図》

南の空の星座、オリオンが、銀河を背負って、冬の奈良の夜空に輝いて見える時に

三笠の山をシルエットに、東大寺の大屋根にそびえる
鴟尾しびの姿を造形として構成しました。

鴟尾は、火災などの魔除けとして、建物の大屋根に設置されるものですが、その形をパブリックアートとして形象化し、オリオン星座は、三つ星を中心にイメージし、形にとらわれず銀河の大きな流れとして、表現しています。

オリオン座は、キャンベラ市では1月の夏の夜空に輝いて見える星座ですが、奈良市とキャンベラ市で同時に見える、同じ星座を通して、そのつながりを共感出来る場となればと、ねがって、かたち造りました。

